

名品コレクション展 I

2026年3月20日（金・祝）～6月7日（日）

名古屋市美術館のコレクション

エコール・ド・パリ

第一次世界大戦後、芸術の都パリには世界各地から夢を抱いた若い美術家たちが集まってきました。

モディリアアーニ、シャガール、スーチン、パスキン、キスリング、藤田嗣治、ヴァン・ドンゲン、ザツキン、ブランクーシなど、故郷を離れた異邦人たちは、貧しいながらも自由に活気に溢れた生活のなかで、パリ生まれのクトリロ、ローランサンといった画家仲間との交友や新しい芸術が次々に登場するパリ画壇に刺激されながら、それぞれ独自の芸術を開花させました。

芸術の都パリに育まれた画家たちは、総称して「エコール・ド・パリ」と呼ばれています。身近な人々の姿や街角の風景を描いた彼らの作品には、キュビズムやシュルレアリスムといった同時代の前衛的な芸術とは違って、庶民生活への親密感が溢れるとともに、異邦人としての郷愁が漂っています。

「エコール・ド・パリ」の系譜につながる日本人画家としては、パリに生きパリを描き続けた荻須高德をはじめとして、田中保、海老原喜之助、岡鹿之助などが活躍しました。

メキシコ・ルネサンス

20世紀初頭のメキシコ革命を背景として、マヤ、アステカといったインディオ文明の復興と新しいメキシコの建国精神を民衆に伝えるために創始されたメキシコ壁画運動は、アメリカ大陸において初めて登場した美術運動として「メキシコ・ルネサンス」とも呼ばれ、世界的に高く評価されています。

壁画運動の三大巨匠であるオロスコ、リベラ、シケイロスはイタリア・ルネサンスの壁画をはじめとして、ヨーロッパの近代美術（表現主義、キュビズム、未来派など）に学びながら、メキシコ民族独自の造型を踏まえた現代の壁画を三者三様に創造しました。

彼らは1930年代のアメリカ合衆国においても数多くの壁画制作を行って、「アメリカン・シーン」の画家たち（シャーン、スローンなど）をはじめとして、アメリカの現代美術の誕生に大きな影響を与えています。

三大巨匠の他にも、壁画運動以降の世代を代表する画家タマヨ、民衆版画家ボサダ、魅力的な女性画家カーロやイスキエルド、写真家ブラボーやモドッティなど、数多くの個性豊かな美術家たちが活躍しました。

北川民次もまた同時代のメキシコに滞在して、野外美術学校の運動に携わりながら、壁画運動から学んだ精神と画風によって、帰国後は日本画壇において「反骨の画家」として活動しました。

現代の美術

第二次世界大戦以降、急速に展開した現代美術は、既成の美術の枠組みを越えて、まったく新しい表現や造形、空間や概念を開拓してきました。パリからニューヨークへ中心地が移行して、国際化した美術界において、数多くの日本人作家が海外に進出して、創作的な活動を活発に展開しています。

名古屋文化圏もまた、荒川修作、桑山忠明、河原温といった国際的に評価の高い作家たちを輩出しました。彼らは、ある特定の概念を言葉や記号などによって提示する「コンセプチュアル・アート」や表現を極限まで切り詰めた「ミニマル・アート」などの現代美術の分野の代表作家として知られています。

1980年代以降になると、現代美術は新しい局面を迎え、その表現と内容がより豊かに多様化して、それぞれの作家の思想（芸術観）が作品のなかに明確に現れてきました。

新しい世紀の激動に翻弄されながら現在も、作家たちは私たちが生きている時代と世界を、過去から未来へと連続する時間の流れのなかで、あるいは生命と宇宙の連関のなかで、それぞれ独自の観点から鋭く探求し、深く思索することによって、新しい美術を創造しようとしているのです。

郷土の美術

名古屋の近代美術は、明治後期頃から本格的に始まりました。東京に学んだ野崎華年と鈴木不知が洋画塾を開設して、後進の指導を始めるとともに、東京美術学校に学んだ加藤静児や太田三郎が文展に入選するようになって、1910年には、名古屋の洋画家・日本画家を結集した東海美術協会が創設されました。

大正期には、名古屋独自の洋画グループとして、岸田劉生の草土社に触発されて1917年に結成された愛美社（大澤鉦一郎、宮脇晴など）や関東大震災を契機に1923年に結成されたサンサシオン（松下春雄、鬼頭鍋三郎など）などが登場しました。

昭和期には、二科会の初期の会員となった熊谷守一や横井礼以、春陽会に参加した山本鼎、帝展の代表作家となった佐分真、独立美術協会に参加した伊藤廉や三岸好太郎、三岸節子などが東京画壇で活躍しました。1930年代の前衛美術の分野では、シュルレアリスム絵画・写真（北脇昇、下郷羊雄、山本悋右など）や抽象絵画（村井正誠、矢橋六郎、山田光春など）が活発な活動を展開しました。

日本画では文展の川合玉堂、院展の前田青邨をはじめ、地元では平岩三陽、渡辺幾春などが活躍しました。

エコール・ド・パリ シャガール『寓話』

白ロシア（現在のベラルーシ共和国）のユダヤ人家庭に生まれ、パリで活躍した画家マルク・シャガール（1887-1985）。モチーフの浮遊感と豊かな色彩によって作られる、幻想的で、幸福感と哀愁がない交ぜになったような作品は、今なお多くの人々を魅了しています。

“色彩の魔術師”とも呼ばれるシャガールですが、1922年、ドイツで銅版画家ヘルマン・シュトルックに銅版画技法を学んだことで、版画制作も手掛けていくこととなります。その契機となったのが、画商アンブロワーズ・ヴォラールからの制作依頼でした。以前からシャガールに興味を持っていたというヴォラールは、1923年、シャガールにロシア作家ゴーゴリの《死せる魂》の挿画制作を依頼します。エッチング、ドライポイント、アクアティントといった銅版画の技法を使って描かれた《死せる魂》の挿画は、豊かな心理描写やユーモア溢れるモチーフの表現とともに、銅版画特有のインクの滲みや線描の味わいが存分に活かされた秀作となりました。その出来栄えに満足したヴォラールは間を開けず《寓話》の挿画をシャガールに依頼します。

『寓話』は、フランスの詩人ラ・フォンテーヌ（1621-1695）が編み出した寓話集です。動物を擬人化し、当時の世相、人々の心理を生き生きと記しています。ヴォラールとシャガールは、当初この挿画をカラー・エッチング（色彩銅版画）で仕上げる計画でした。シャガールは色彩銅版画を念頭にグアッシュによる下絵を1926年から制作し始め、1927年の冬までに合計120点をヴォラールに渡しています。ところが、《寓話》の刊行に向けて、版画家と専門の職人たちに下絵をもとにした色彩銅版画を制作させたところ、当時の技術では、シャガールが望む色彩はどうしても再現できませんでした。ヴォラールとシャガールは色彩銅版画での《寓話》刊行を断念し、シャガール自身が銅版画を制作することにしました。出来上がった銅板を、専門の刷り師が刷り上げたのが1931年。その後ヴォラールが交通事故で急逝したことで刊行が滞りましたが、1952年、ヴォラールの遺産相続人から《寓話》の原板を買い取った美術出版・編集者であるテリアード氏によって、ようやく出版に至りました。このとき、一部の作品は、シャガール自身によって手彩色が施されています。当館所蔵の《寓話》はモノクロームですが、陰影のグラデーション、インクの濃淡の味わいなど、絵画的要素が強調された作品群です。

現代の美術 現代美術の3人 荒川修作・河原温・桑山忠明

荒川修作・河原温・桑山忠明の3人は、愛知県で生まれ、国際的に活躍したアーティストです。当館では、この3人を、地域の重要な現代美術作家として位置づけ、それぞれの初期から成熟した時期の作品までを系統的に収集してきました。今回の展示では、改めてこの3人の作家に注目します。

荒川修作は、1936年名古屋市に生まれました。旭丘高校美術科を出て、武蔵野美術大学を中退、1961年にニューヨークに渡ります。渡米前は、綿と布の上にセメントの塊を載せた、棺桶シリーズと呼ばれる作品を制作していました。1964年頃から荒川は、ものを見て意味を読み取る時の人間の身体と心の仕組み、それらについて考えたことを、言葉や記号、図表などを用いて絵画を制作するようになります。

展示室の中には、絵画の前に大きな傾斜台が置かれています。この傾斜台の上を歩きながら、絵画をながめてみてください。皆さんの身体と目、心はどんな動きをしようか？皆さんは、作品の中に入りこんで、作品に参加することになります。荒川は、自身の作品について、「私とは何か」を考える道具のようなもの」と語っていますが、皆さんはその思考実験の一員になるのです。

河原温は、1933年愛知県刈谷市に生まれました。1950年代には、戦後の社会への冷徹なまでのまなざしを含んだ作品で注目され、1959年に渡米、1963年以降、ニューヨークで制作活動を続けました。その日の間にその日の日付を描く「Today」シリーズや、1981年から100万年間の年をタイプライターで打ちこんだ《百万年—未来》、「私は起きた」というメッセージをその日に起きた時間とともに特定の相手に絵葉書を郵送する「I Got Up」シリーズは、時間のさまざまあり様（1日でもあり、途方もないような蓄積でもあり、起床した一瞬でもある）を見せてくれます。私たちは、河原温が残したものによって、河原温という一人の人間が存在した時間を感じ、同時に、私たち一人ひとりが生きてきた、今生きている、これから生きる時間についても思いを巡らすことができるのではないのでしょうか。

桑山忠明は、1932年名古屋市に生まれました。東京芸術大学日本画科を卒業後、1958年にニューヨークに渡ります。桑山は、日本画材、アクリル・アルミ、油絵具など、使用する素材は変えながらも、一貫して、限られた色彩で面を構成する作品を作り続けました。観念や意味、個人の主観を配し、色やものとしての美しさそのものを見せてくる桑山の作品を前に、揺り動かされる感情があるとすれば、それは何か、簡単には言語化できないものなのではないのでしょうか。

メキシコ・ルネサンス 民衆と美術

1910年に始まったメキシコ革命は、長く続いた独裁政権の打倒と民主化を目指すものでした。革命を経て起こったメキシコ壁画運動では、メキシコの民族的ルーツや革命の意義などが公共施設の壁面に描かれ、民衆に向かって、広く革命の思想が伝えられました。しかし、当時の作家たちが、革命の意味を声高に訴える作品ばかり描いていたわけではありません。彼らは、メキシコに生きる人々やその生活についても丁寧に描いていました。今回の展示では、近年当館に新収蔵された作品を含めて、メキシコの風土とそこに暮らす市井の人々の姿が描かれた作品をご紹介します。

《ホコの葬列》でディエゴ・リベラが描いたのは、悲しみに暮れ、うつ向きがちに歩く人々の姿。この地域の慣習でしょうか、馬が棺を運び、葬列の向こう側には、花輪のような装飾が見えます。葬列全体の姿を見せるのではなく、土塀によってその一部を切り取ることで、人々の日常と、そこにふと訪れる悲しみが垣間見えるかのようです。

デルフィーノ・ガルシアとアマドール・ルーゴは、いずれも北川民次が校長を務めた、メキシコ野外美術学校の教え子です。旧来の、ヨーロッパ流の美術教育制度ではなく、もっと自由に美術を学ぶ場として作られた野外美術学校では、描くモチーフについても、メキシコの身近な風物が多く取り上げられました。令和6年度に受贈した、ガルシアの《銀坑》もルーゴの《市場》も、日常の風景を真摯に見つめ、描き出しています。

鮮やかな色彩と、幻想的な画面が目を引く《水浴する人々》は、メキシコで長く活躍し、岡本太郎《明日の神話》の制作助手も務めた、竹田鎮三郎の作品です。令和5年に受贈した本作からは、メキシコ先住民風俗への、作者の強い関心がうかがえます。

さらに本展では、令和7年度新収蔵作品である、北川民次《画家の仲間たち》を展示します。画面上部、左から鈴木幸雄（幸生）、安藤幹衛、滝本正男、画面下部で眼鏡をかけた人物が北川です。北川の前に差し出された紙片には「画家の仲間たちのカリカチュア」とスペイン語で書かれています。画面に人々が顔を寄せ合っている状況、下部の紙片、拳を振り上げた様子など、リベラ《プロレタリアの団結》との関係性も考えられる作品です。

郷土の美術 大正期の日本画

今回の名古屋市美術館名品コレクションⅠ「郷土の美術」では、「大正期の日本画」を特集します。タイトル通り、大正時代の日本画を中心にご覧いただく展示です。

みなさん、まずは展示室をぐるっと見回してみてください。すべてではありませんが、多くの作品に、一つの表現的傾向がみられると思います。—お気づきでしょうか。なんだかボヤっと、モヤっとしている作品があると思いませんか？実はこの紗がかかったような量し（ぼかし）表現は、大正期の日本画に特徴的な表現の一つなのです。

美人画の名手として知られた渡辺幾春の《若き女》と《女》は、いずれも大正末期に描かれた作品です。女性たちを表す輪郭線には、外側にうっすらとした影のようなものがあります。特に《女》は、その姿勢や目線も相まって、艶っぽく、それでいて怪しげな雰囲気を生み出しています。喜多村麦子の《[中国人物]》と甲斐庄楠音《女の顔》にも、同様のことが言えるでしょう。このような量し表現は、大正期、京都画壇を中心に流行した「大正デカダンス」と呼ばれる退廃的・耽美的な表現において多く見られました。

清水有聲は生涯東京を拠点として活動しましたが、大正9年（1920）に描かれた《椿咲く島》を見ると、ここにも量し表現を確認することができ、この表現が当時京都画壇だけでなく、東京画壇でも使われていたことがわかります。しかし、その用い方は「大正デカダンス」に見られるものと同一ではありません。大正期の東京画壇では、特に再興日本美術院の横山大観や安田靫彦、小林古径らを中心に、夜や雨の空気感を表現するために量し表現が使われていました。前田青邨《修羅道》は昭和初期の作品ではありますが、この量し表現を発展させたものと捉えられます。有聲の《椿咲く島》でも、画面の多くを占める木々の葉や下草などに量しが使われており、夕暮れ時に家路を急ぐ女性たちの情景を伝えています。横山葩生は独学で日本画を習得した作家ですが、大正期の作と推測される《太子堂》も、やはり当時の画壇の影響を受けていると言えるでしょう。

解析学のコーナーでご覧いただいた前田青邨《宿場》には、米点（べいてん）という点描表現や伸びやかな描写など、当時「新南画」と呼ばれた傾向が見られます。当時西洋美術の潮流となっていた、表現主義的な傾向が日本にもたらされたことで、日本画壇においても、伝統的な筆法や写実表現にとらわれず、より多様な表現が生まれていったことを感じていただければ幸いです。

コレクション解析学

「大正期の日本画」

前田青邨《宿場》1914-15年頃

明治18年(1885)、現在の岐阜県中津川市に生まれた日本画家、前田青邨(1885-1977 本名:廉造)。上京し、日本画家で小説の挿画も手がけた梶田半古に師事。その後、岡倉天心や横山大観らが組織する美術団体・日本美術院を中心に活躍しました。今回の「コレクション解析学」で取り上げる作品は、前田青邨が大正前期に描いた《宿場》です。

青邨はこの地方を代表する日本画家ですから、ご存知の方も多いかも知れません。では、「前田青邨」と聞いて、みなさんはまずどのような作品を思い浮かべるでしょうか。重要文化財にも指定されている、《洞窟の頼朝》(大倉集古館所蔵)のような、重厚な歴史画でしょうか。それとも、晩年に見られる、墨線と滲みが味わい深い白描的な作品でしょうか。

多かれ少なかれ、大抵の美術家は生涯でその作風が変化していきます。《宿場》の中で、屋根や山の表現に用いられている米点(ベいてん)という点描表現、伸びやかな描写などは、この時期の青邨作品に見られる特徴です。では、この表現が一人青邨だけのものであったかという点、もちろんそんなことはありません。同時代に生き、制作をしている作家たちには、共通した表現傾向が見られます。今回の解析学では、青邨の《宿場》と日本美術院の横山大観らの作品を見比べながら、共通する表現傾向を探ります。また、青邨の画風も時代が下ると少しずつ変化していきます。その変化する画風を起点に、大正時代に多く見られる、別の表現傾向についても考えます。さらには、画壇の東西でその傾向に違いがあるのか、という点にも注目します。

明治末期から大正にかけ、当時西洋美術の潮流となっていた表現主義的な傾向が日本にもたらされたことで、大正期の日本画には様々な表現が用いられるようになりました。多種多様でありながら、画壇の流行とも言える画風の特徴がわかると、この時代の日本画がより興味深く感じられることでしょう。

コレクション解析学 2025

当館のコレクションから1点を選び、その魅力を学芸員が紹介する美術講座です。

日時: 2026年5月23日(土) 14:00- (約90分)

演題: 「大正期の日本画」

作品: 前田青邨《宿場》1914-15年頃

講師: 松井美保(当館学芸課課長補佐)

会場: 当館2階講堂(定員180名、先着順、入場無料)

名古屋市美術館  Nagoya City Art Museum

名古屋市中区栄二丁目17番25号(芸術と科学の杜 白川公園内)

TEL 052-212-0001 FAX 052-212-0005

<http://art-museum.city.nagoya.jp/>